

“嘉靖本” “水滸傳” と初期の「水滸傳」 文繁本系統

荒木達雄

一

中國・北京の國家圖書館古籍部に『忠義水滸傳』殘本が所藏されている。その内譯は第四七回から第四九回、および第五十一回から第五十五回の計八回分で、『國立北平圖書館刊』第八卷第二號（民國二十三年^{四三}四月）にもこの本の第五十回の見開き一枚の景照が掲載されている。『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、一九七五年）の名で影印公刊されている國家圖書館藏明容與堂刻『李卓吾先生批評忠義水滸傳』百卷百回の文章がこの本とほぼ同じであることから、筆者は二〇一一年、國家圖書館にてこの本のマイクロフィルムを閲覧し、容與堂本との比較對照作業を行った。本稿はその結果にもとづき兩者の關係について再考し、その「水滸傳」の各種版本のなかにおける位置について考察を行おうとするものである。

二

まず、初期の「水滸傳」についての基本情報を確認しておきたい。これについては高島俊男「石渠閣補刊本研究序説」（『伊藤漱平教授退官

“嘉靖本” “水滸傳” と初期の「水滸傳」 文繁本系統

記念中國學論集』汲古書院、一九八六年）に簡にして要を得た整理がある。

現在「水滸傳」の名稱が確認できるもつとも古い文獻は高儒『百川書志』（嘉靖十九年序）で、「忠義水滸傳一百卷」¹と記されている。その後もいくつかの書目、筆記などに「水滸傳」の名が現れる。當時すでに複數の「水滸傳」があつたようだが、明・李開先『詞廬』に「一事而二十冊」とあり、清・錢曾『也是園藏書目』に「舊本羅貫中水滸傳二十卷」とあるように、二十卷に分かたれていたのが古い姿（「舊本」「古本」などと稱される）だつたようである（文徵明が書寫したという「古本水滸傳」⁴もこれであつたかもしれない）。また、嘉靖年間に武定侯郭勛がそれまでの「水滸傳」を改編した版本を印行したと言われている。これらのことから、「水滸傳」の名稱を持つ長篇小説は嘉靖中期以前までには二十卷本の形で成立し、嘉靖半ばには後出の百卷本を含む複數の版本が現れていたことがわかる。

しかし、現在我々が見られる「水滸傳」の名を冠した本は、年代がより降るものばかりである。刊行年代のわかる完本で、現存するもつとも早いものは萬曆二十二年（二五九四）の『京本增補校正全像忠義水滸傳評林』二十五卷であり、それより早いと見られる『新刊京本

全象挿増田虎王慶忠義水滸傳』殘本もある。しかしこれらはいずれもそれ以前にあった本をもとに文章を節略して作られたいわゆる文簡本である。嘉靖年間の文獻に見える「水滸傳」は節略前の本、いわゆる文繁本であったと考えられているし、巻数も一致しないことから、これらと同じものではないだろう。文繁本のうち、完全な形で残る最も早いものは、前述の容與堂刻『李卓吾先生批評忠義水滸傳』百卷百回（以下、容與堂本と稱す）で、その初刻本は萬曆三十八年（二六一〇）の刊行と見られる。巻数が嘉靖年間の記録と一致することなどから嘉靖年間の版本とは繼承關係にあると考えられている。この前提のもと、萬曆年間の版本によりつつ、嘉靖年間の百卷本もこのような文章、内容であったらうと假定して議論を進めているのが現状である。しかし嘉靖中期から萬曆三十八年までは六十年以上の間がある。この空白期間中、「水滸傳」がどのような文章であったのか、嘉靖年間から萬曆年間まで百卷本の文章はどのように繼承され、どの程度改變されてきたのか、正確にはわかっていない。二十卷本と百卷本の間にどの程度の改編があったのかもわからない。そもそも両者が單線的な繼承關係にあるのかも定かではないのである。

文繁本の系統に屬し、容與堂本より古いと見る研究者がいる版本もある。『京本忠義傳』殘葉および、本稿でとりあげる國家圖書館藏『忠義水滸傳』殘本である。どちらも序文や刊記など刊行年代を明示する部分は残らない。なかでも『京本忠義傳』はわずか二葉を存すのみである。『京本忠義傳』については多くの研究者により様々な見解が出されているが、紙幅の都合により本稿では觸れない。

『忠義水滸傳』殘本は發見當時から嘉靖年間の本とされていたが、實際にそのことを檢證できた人はほとんどいなかった。しかし近年、

大内田三郎『水滸傳』版本考―容與堂本について（二）（『大阪市立大學文學部紀要 人文研究』第四十五卷第五分冊、一九九三年）において、使用されている字體が嘉靖から隆慶年間にかけての出版物に廣く見られるものであることが指摘され、佐藤晴彦『國家圖書館藏『水滸傳』殘卷について―嘉靖本か？』（『日本中國學會報』第五十七集、二〇〇五年）が、異體字の用法が嘉靖年間に出版された小説戯曲の用字習慣に近いと判じていることから、本稿ではこの殘本を嘉靖年間ないしそれからさほど遠くない時期に刊行された可能性が高い本という意味で「嘉靖本」と稱する。

嘉靖本は每半葉十行毎行二十字、版心には「水滸傳幾回」、その下に葉数が刻される。版心の文字は、原本の保存状態のためか撮影具合のためか、よく見えない葉もままある。各回第一行に「第幾回」、最終葉最終行に「第幾回終」。どの回も各葉の表からはじまり、本文が表面で終わっている場合、その裏面は回数表記以外すべて空行で、次の回は次葉表面にはじまる。挿圖は現存しない。詩の引用の際は毎行頭を二から四格下げ、二句ごとに改行している。容與堂本が、毎行頭は一格下げのもの二句ごとの改行はせずに詰めている（ゆえに句の途中での改行が多い）のと比べ、紙面をゆつたりと使っている感を受ける。また、第五十一回第一葉のみ、第一行から第三行までに「忠義水滸傳卷之十一」／施耐菴集撰／羅貫中纂修」とあり、第四行に「第五十一回」と記されている。第五十一回が第十一卷の冒頭である以上、第一回から第五十回までは十卷あったはずで、單純に計算すれば一巻あたり五回分収められていることになり、全百回は二十卷となる。これもこの本が容與堂本より古いと見なされる理由のひとつである。第四十六回から第五十回、第五十一回から第五十五回と、五回毎にわか

れて発見されたとの証言⁽¹⁰⁾もこの推測を後押しする。ただし、第十一巻の最後であるはずの第五十五回最終葉には単に「第五十五回終」とあるのみで、巻末であることは記されていない。このように容與堂本と巻数のみが異なり、回目、回数、回の分け方、内容は一致している。

高島俊男『水滸傳の世界』（大修館書店、一九八七年）「十三 一番いいテキスト」によれば容與堂刻本は現在六部現存している。上海圖書館にも高島氏の言及していない残本があり、これも加えれば七部となる。そのうち全巻そろっているのは國家圖書館藏本、國立公文書館内閣文庫藏本、天理圖書館藏本の三部である。この三部は版式が同じで、文字も少量の異同があるのみだが、批評の有無や内容の違い、白魚尾と黒魚尾の違いなどが見られる状況からして互いに異版のようである。なかでも天理本は回の冒頭および末尾が「李卓吾先生批評忠義水滸傳」となっている回と「諸名家先生批評忠義水滸傳」の回とが混在している。高島氏は國家圖書館本（同氏は「北京B本」と呼稱）がもつとも筋がよく、容與堂原刻に近いだろうと述べている。大内田三郎『水滸傳』「版本考―容與堂本について」（『ヒブリア』No.79 昭和五十七年）は、國家圖書館本（同氏は「北京本」と呼稱）は内閣文庫本より原刻に近く、國家圖書館本と天理本は極めて近い関係にあるが天理本がより原刻に近いと推測する。兩者の異同箇所を見ると、國家圖書館本のほうが本来の文字と思われる部分も、天理本のほうがそう思われる部分もある。刷りの状態は國家圖書館本のほうがよく、天理本は版木の磨滅、本の原所有者による修正、書き換えなどが目立つ。それぞれの版木の最初の状態においてどちらが原刻に近かったのかは判断しがたいが、版木が作られてから数多く使用されていると思しき天理本のほうが、その間により多くの破損、補修、變更を経ている可能性が高い。さらにか

りの缺葉もあることから、本稿ではさしあたり國家圖書館本をもつて容與堂本を代表させ、嘉靖本との校勘を行う。嘉靖本と容與堂本とを詳細に比較することを通じて萬曆三十八年以前の「水滸傳」版本の空白期間を多少なりともさかのぼれるものか、検証してみたい。

三

これまでに専門的に嘉靖本と容與堂本を比較した研究を公表した研究者として、馬幼垣教授と佐藤晴彦教授が挙げられる。佐藤氏はまず『水滸傳』「嘉靖」残巻について（『神戸外大論叢』四十二巻三号、一九九二）で簡単にこの本を紹介し、前掲論文「國家圖書館藏『水滸傳』殘巻について」で兩者の文字づかいの違いと刊行年代との関わりを論じたうえで、この本は嘉靖年間に刊行された容與堂本の前身のテキストで、誤刻や脱落が多く抜群に優れたテキストとは言えないが、「水滸傳」の古い姿をうかがう資料となると述べている。二〇一〇年には『水滸傳』は何時ごろできたのか？（『水滸傳の衝撃 東アジアにおける言語接觸と文化受容（アジア遊學131）』勉誠出版、所収）で、容與堂本の文章の成立時期は嘉靖以前にまでさかのぼれる可能性を示されている。

馬氏は「嘉靖殘本『水滸傳』非郭武定刻本辨」（『明代小説面面觀 明代小説國際學術研討會論文集』學林出版社、二〇〇二年。後に二〇〇三年付「後記」を附し、『水滸二論』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇七年、に再録）において、この本は文字づかいや校正の杜撰さから見て到底善本と呼ぶに値しない「垃圾本」であると述べ、この本を嘉靖年間の善本である郭武定本と同一視する見方を批判している。容與堂本との関係については、（一）この殘本を後出の容與堂本が修正した可能性、（二）兩

者は同じ來源を持ち、校訂がより杜撰だったのがこの殘本である可能性を示し、後者の可能性が高いと述べている(ただし明確な根據は示していない)。さらに「後記」では、この殘本の刊行年代は、嘉靖はおろか萬曆中期まで降るのではないかと推測している。本稿では兩氏の成果を踏まえたうえで、兩氏はほとんど言及していなかった嘉靖本と容與堂本の「水滸傳」版本系統上の位置關係、嘉靖年間から萬曆年間までの「水滸傳」の様子を推測する手がかりについて考察していきたい。

四

本節ではまず、嘉靖本と容與堂本の異同箇所を分類したものの一部を例示し、それらの異同が生じた原因を考えていく。分類は次のように行つた。

「A. 文字の入れ替わり」文字数は変わらず、現れる文字が異なっているもの。異體字もここに分類できるが、これについては佐藤氏ですでに詳細に研究を行っているため、本稿では意味の違いの生じる文字の異同を主要な対象とする。「B. 脱落、増加」兩者で同じ箇所文字数が異なっているもの。この大分類二種それぞれの下にさらに「(I) 容與堂本が正しく嘉靖本が誤っている」、「(II) 嘉靖本が正しく容與堂本が誤っている」、「(III) 兩者とも文意は通じる」、「(IV) 兩者とも誤っている」、の四種の小分類を設けた。

A. 文字の入れ替わり

(I)

1 嘉…你要跟我作神行法需要只吃素酒且向前回去
容…你要跟我作神行法需要只吃素酒且向前面去 (第五十三回)

2 嘉…朱全到黑旋風那廝如何却敢入貴莊

容…朱全道黑旋風那廝如何却敢入貴莊 (第五十一回)

3 嘉…有事出班啟奏無事捲簾退班

容…有事出班啟奏無事捲簾退朝 (第五十四回)

4 嘉…他莊上果有人來投我時定獻來奉獻將軍麾下

容…他莊上果有人來投我時定縛來奉獻將軍麾下 (第五十回)

5 嘉…便重兄弟孫新與舅舅樂和先護持車兒前行着

容…便令兄弟孫新與舅舅樂和先護持車兒前行着 (第四十九回)

ここに屬する例がもつとも多い。1は字形の類似からの誤り。2は字音の類似による誤り。3は直前に現れた文字をもう一度書いてしまったものと思われる。4は「獻來」でも文意は通じるが、直後に「奉獻」とあり意味が重複するため、「縛つて獻ずる」容與堂本のほうがよい。嘉靖本は直後に現れる「獻」を先走つて書いてしまったのかもしれない。5のように理由の推測しがたい誤りもある。1や4のような「寫し間違い」と見られる誤りがあることから、嘉靖本の文章はここで新たに書かれたり、以前の版本の文章に意をもつて手を加えて書き直すことで作られたりしたというよりは、以前の版本を單純に書き寫して作られた可能性が高いと思われる。

(II)

6 嘉…自己磨拳擦掌假氣問從人

容…自己磨拳擦掌假氣問從人 (第五十二回)

7 嘉…樂廷玉帶了鐵鎗上馬挺鎗殺將出

容…樂廷玉帶了鐵鎗上馬挺鎗殺將出 (第四十八回)

8 嘉…容易入得來 却是出不得

容…容易入得來 只是出不得 (第四十七回)

9 嘉…耿直分毫不肯苟取於人

容…耿直分毫不取苟取於人(第五十三回)

(I)と同様の誤りが見られる。6は字音によるものか。7は字形による誤り。直後に「挺鎗」とある以上、容與堂本が誤っていると見なすべきである。8と9は直後に現れる文字を先に書いてしまっている。つまり、容與堂本も先行する本の単純な書き寫し方式で作られたのであろう。

(III)

10 嘉…李達擗惡無人敵

容…李達猛惡無人敵(第五十二回)

11 嘉…扯住朱全美髻說道

容…扯住朱全美髻說道(第五十一回)

12 嘉…馬知府笑道

容…馬府尹笑道(第五十三回)

13 嘉…收拾了道衣寶劍二口并冠巾如意等物

容…收拾了道衣寶劍二口并鉄冠如意等物(第五十四回)

兩者とも文脈上支障はない。ただ11については、朱全の綽名が「美髯公」であることを考えれば嘉靖本のほうがよいかもしれない。13は道士である公孫勝のいでたちを描いたものだが、容與堂本は本文で「鉄冠」としておきながら、第五十四回の挿繪の公孫勝は「鉄冠」をかぶっているとは到底見えず、むしろ「冠巾」であるように見える。単純な誤りかもしれないが、この挿繪が容與堂本の文章ではなく、先行する別の本にもとづいて描かれたためとも考えられよう。

また、以下のような異同も多く見られる。

14 嘉…火炮鐵砲五百餘架尽裝于車上

容…火炮鐵砲五百餘架都裝載上車(第五十五回)

15 嘉…兩人交了二十餘合

容…兩個鬪到二十餘合(同)

16 嘉…宋江見活捉了那天目將彭圮

容…宋江見活捉拿得天目將彭圮(同)

17 嘉…宋江收軍退到山西下寨屯了人馬

容…宋江收軍退到山西下寨屯住軍馬(同)

18 嘉…我等若無號船接應盡被捉了

容…我等若無號船接應盡被擒捉(同)

19 嘉…生擒的五百餘人，奪了戰馬三百餘疋

容…生擒的五百餘人，奪得戰馬三百餘疋(同)

20 嘉…宋江道但且放心

容…宋江道但請放心(同)

兩者ともに文意は通じ、嘉靖本に筆畫數の少ない文字が現れている。この種の例は第五十五回に集中して見られるのが特徴である。

(IV)

21 嘉…彭圮馬來得近扭過身去把套索望空一撒

容…彭圮馬來得近扭過身軀把套索望空一撒(第五十五回)

「身をひねって」の意であるから、容與堂本の「扭」は字形の類似による、嘉靖本の「去」は字音の類似による取り違えであろう。

B. 脱落、増加

(I)

22 嘉…一箇是棄命三石秀

容…一箇是拚命三郎石秀(第四十八回)

23 嘉…李達道柴皇被他打傷嘔氣死了，又來占他房屋又喝交打柴大官

人。便是活佛也忍不得。 柴大官人自來與山寨有恩。今日他有危難如何不下山去救他

容…李逵道柴皇城被他打傷嘔氣死了，又來占他房屋又囑教打柴大官人。便是活佛也忍不得。晁蓋道柴大官人自來與山寨有恩。今日他有危難如何不下山去救他（第五十二回）

24嘉…孫新出來接見哥哥 下了車兒同到房裏看視弟媳婦病證
容…孫新出來接見哥哥且請嫂嫂下了車兒同到房裏看視弟媳婦病症（第四十九回）

以上三例は嘉靖本が文字を脱している。石秀の綽名は「拼命三郎」である。「柴皇」は嘉靖本でもほかの部分では「柴皇城」と稱されている。また、「晁蓋道」がなければ發話者が代わったことがわからず、物語が理解しにくい。24は佐藤氏が、容與堂本のほうがわかりやすい例としてすでに指摘している。

25嘉…扶攬樂大娘子上 馬幫着便行

容…扶攬樂大娘子上車兒顧大嫂上了馬幫着便行（第四十九回）

この例は兩者の意味がかなり異なっている。嘉靖本では「樂大娘子を支えて馬に乗せ、守りながら進んだ」である。容與堂本は「樂大娘子を支えて車に乗せ、顧大嫂は馬に乗り、助けながら進んだ」となる。第四十九回は豪傑たちが牢に入れられた仲間を救出する回であるが、

そのなかで樂大娘子は唯一「豪傑」ではない。牢破りを果たしたのち一行は梁山泊に投ずるのだが、樂大娘子は梁山泊百八人の名簿に入らぬ豪傑の家族にすぎない。ゆえに豪傑たちが颯爽と馬に乗るなか樂大娘子だけは車に乗り、護衛されているのである。嘉靖本をまとめた人物が、樂大娘子が他の豪傑たちと轡を並べている姿を想像してこう書いたとは、前後の描寫との關係からしてありえない。假に書寫する際

に気づかずに誤つたものだとしても、後發の容與堂本が、本來あつた文字はいつさいいじらずにうまく數文字を補い正しい文にしたとも考えにくい。ではどのように理解すればよいか。『三國志演義』版本研究においては、中川諭『三國志演義』版本の研究―建陽刊「花關索」系諸本の相互關係―（『日本中國學會報』第四十四集、一九九二年）や魏安『三國演義』版本考（上海古籍出版社、一九九六年）『三、三國演義』版本的分類法』などで同様の現象がすでに指摘され、版本系統の推測の有力な情報とみなされている。あるテキストを書き寫す際、少し間をおいて同じ文字が二度現れると、實際には前の文字までしか寫していないのに、後の文字まですでに抄寫し終えたものと見誤り、間の文字を飛ばしてしまうという現象であり、魏安前掲書はこれを「串句脱文」と命名している。内容を理解しながら書くのではなく、右から左に單純に書き寫すからこそ犯しがちな誤りである。25はまさにこれに該当し、「上了」に挟まれた文字列が、文章の内容とは關係なく抜け落ちてゐる。この種の誤りはほかにもある。

26嘉…左手拈弓右手取箭 拽滿弓

容…左手拈弓右手取箭搭上箭拽滿弓（第四十七回）

27嘉…孫立領了一行人馬都來到祝家莊 上牆裏望見是登州旗號，報入莊裏去。

容…孫立領了一行人馬都來到祝家莊後門前。莊上牆裡望見是登州旗號，報入莊裏去。（第五十回）

ともに、同じ文字に挟まれた中間部分が脱落している。26は、脱落のある文でもほぼ同様の意味に讀むことはできる。しかし27では文意にも相違が生じている。嘉靖本では孫立が祝家莊のなかに入ったようにも讀めるが、直後に孫立が祝家莊に入る描寫があるため、この時點

ではまだ入っていないことが明確な容與堂本のほうがよい。24もふたつの「嫂」に挟まれた部分が抜け落ちており、この種の誤りの結果かもしれない。これらの現象から判断すると、嘉靖本以前に容與堂本と同じ文章がすでにあり、これを抄寫する際に誤つてできたのが嘉靖本のこれらの例ということになる。しかし嘉靖本は嘉靖年間あるいはそれからあまり遠くない時期に刊行されたという前提に立てば、底本が容與堂本そのものであったことはあり得ない。

以上の状況を考え合わせると、容與堂本、嘉靖本とともに、先行する版本に意圖的な變更を加えることなく、單純に書き寫す方式で作られたものと判断できる。そして24から27にあたる部分は、もとの本は容與堂本と同じ文字を持つていたのだろう。逆に、嘉靖本にある文字を容與堂本がこの種の原因で脱している例は見られないことから、容與堂本のほうが校正はややしつかりしていたのだろう。嘉靖本と容與堂本は同一の文章にもとづいて作られた兄弟關係、從兄弟關係にあると言えよう。この、兩者のもととなった文章をもつ版本を假に「祖本」と呼ぶこととする。この假定にもとづけば、容與堂本において13の文と挿繪が一致しない理由も、祖本には「冠巾」とあつたゆえ説明でき。以下はこの假定のもと、引き続き異同箇所を見ていきたい。

(II)

28 嘉…只見屏風背後轉出一人來

容…只見屏風背 轉出一人來 (第五十一回)

29 嘉…你頼我大蟲、和你官司裏去理會

容…你頼我大虫、和你官司 理會 (第四十九回)

容與堂本が必要な文字を脱している例。29は、解珍、解寶という獵師の兄弟が、山の上で射止めた虎がその地の權勢家毛太公の庭に轉が

り落ちたのでとらせてほしいと頼んだところ、虎はすでに隠されていて、そのようなものは落ちてこなかった、いいがかりをつけるなど言われたことに對する發言。「俺の虎をだましとりやがつて、おまえと役所に出て決着をつけてやろう」である。容與堂本では「おまえの役所とケリをつけてやる」となり、不十分である。祖本の文字を書きもらしたのであろう。全體的には容與堂本のほうが嘉靖本より祖本の文章に近いと思われるのだが、このような例があるため容與堂本も時に祖本に忠實でない部分があることがわかる。

(III)

30 嘉…先生和李逵大路上行着却得再來相接

容…先生和李逵大路上來 却得再來相接 (第五十四回)

31 嘉…只見 人煙輳集

容…只見街市人烟輳集 (第五十四回)

32 嘉…李逵看那一把鉄鎚 約有三十來斤

容…李逵看那 鉄鎚時約有三十來斤 (第五十四回)

33 嘉…只得寫表 申奏朝廷

容…只得寫表差人申奏朝廷 (第五十四回)

34 嘉…分撥衆頭領下了七八箇小寨 圍遶大寨

容…分撥衆頭領下了七八箇 寨圍圍遶大寨 (第五十二回)

35 嘉…顧大嫂開張酒店家 又殺牛羊開賭

容…顧大嫂開張酒店家裡又殺牛 開賭 (第四十九回)

36 嘉…山背後 一彪人馬撞出、 擁出病尉遲孫立攔住去路

容…山背後撞出一彪人馬、 當先擁出病尉遲孫立攔住去路 (第五十四回)

37 嘉…衙門人來報 呼延灼收捕梁山泊得勝

容…衙門人 報道呼延灼收捕梁山泊得勝(第五十五回)

38 嘉…水底下 鑽將起

容…水底下早鑽 起(第五十五回)

相互に相手の有しない文字を持つている例。33、35のように、あつたほうがわかりやすい字を脱している例もあるが、誤りとまでは言えず、祖本の文字を落としたのか、祖本になかったものを補ったのかの判別もし難い。36はここに分類したが、容與堂本のほうが明瞭である。祖本は容與堂本のごとくであり、嘉靖本は「山背後」のあと「撞出」を飛ばして「一彪人馬」を寫してしまい、後でそれに氣づいて「撞出」を加えたのであろう。戦闘中、山の向こうから新たに部隊が飛び出してきた場面であるから、存現文を用いた容與堂本のほうが場面にふさわしいし、嘉靖本は「撞出擁出」となつてしまい、リズムもよくない。

(IV)

39 嘉…那馬渾身墨定 四蹄雪練價白因此名爲蹄雪鳥 那馬日行千里

容…那馬渾身墨錠似黑四蹄雪練價白因此名爲蹄雪鳥 馬日行千里
(第五十四回)

官軍の將軍・呼延灼に下賜された馬についての描寫。嘉靖本の「蹄雪鳥」も、容與堂本の「蹄雪鳥」も、全身が黒く足先だけが白いさまを表現しているのだが、項羽の愛馬になぞらえているのだから容與堂本のほうが適切である(もつとも嘉靖本はこの後も「鳥馬」と表記しつづけているから、意圖的可能性も否定しきれない。そうだとすると少なくとも「馬」字は不足している)。しかし、その後は「那」を用いて「その馬は一日に千里をゆく」としている嘉靖本のほうがわかりやすい。兩者を合わせて「名爲蹄雪鳥 那馬日行千里」であれば十全であるが、祖本はどうであったのか。雙方ともに一文字足りず、結果として「名

爲」から「千里」が同じ十一文字となつている點をふまえると、祖本の時點ですでに意味の不完全な十一文字であつたと考えるべきかもしれない。

以上、全體の異同の分量から見ればごく一部ではあるが、兩者の關係を考える鍵になりそうな箇所を擧げ、考察を行つてきた。異同の傾向を見ると、Aに屬する異同は、その半數以上が(Ⅰ)嘉靖本の文字が誤つている例である。Bでは、(Ⅲ)兩者ともに文意が通じる例が半數超を占め、もつとも多いが、その次に多いのはやはり(Ⅰ)で、四割弱を占める。兩者は共通の祖本にもとづき別々に作成されたと思われるが、馬氏や佐藤氏が述べているように概して嘉靖本のほうが校正は杜撰であることがうかがえる。

このほかに氣づくこととして、異體字の多さがある。佐藤氏が筆寫年代の推定に用いた「里裏」「箇個」「教叫交」以外にも「亂亂」「備徠」「擔担」「隨隨」「聽聽听」「將將」「蓋蓋」「雲云」「淨淨」「鬚胡」「莊庄」「懼懼」「饑飢」などがあり、すべてではないが、おおむね嘉靖本が畫數の少ない方を使用している。また、「熟皮馬甲五千付(容與堂本『副』)(第五十五回)」「他便知本處地里(容與堂本『理』)虛實(第四十八回)」のように、「發音が同じあるいは類似した文字の異同で、容與堂本は正確で嘉靖本は誤り」という例も少なくない。しかしこれは現代の我々から、あるいは嚴密な漢語・漢字の定義から判斷して誤りと言えただけで、當時の人々には誤りという認識はなく、異體字にすぎなかつたというものもあろう。その境目がどこにあるのかうかがい知ることができないが、嘉靖本は全體的に、似た發音であるならば畫數の少ない字を採用するという傾向にあるとは言える。寫字工や刻工が負擔を軽くしようとしたものか、印刷技術の問題で細かい文字

を避けたものか、理由はわからない。嘉靖本の特徴なのか、祖本がそうであったのを受けついでのかも不明である。また、これらのなかには「翻」の意の「番」、「猶」の意の「由」など、金元明期の口語的テキストに見られる通假字も含まれる。嘉靖本第五十三回に「倒海番江（容與堂本「翻江」）とあるのは、成化說唱詞話『新刊全相唐薛仁貴跨海征遼故事』¹⁾に見える「旌旗風擺番波浪」などと同じく波が逆巻く意である。嘉靖本の「你這斷口邊脉而腥未退頭上胎髮由存（容與堂本「猶存」）（第四十七回）は、『董解元西廂記諸宮調』卷四の歌（宮調「中呂調」、曲牌「鶻打兔」）に「俺哥哥由未表」とあるのを、『董解元西廂記諸宮調』の研究（赤松紀彦・井上泰山・金文京・小松謙・高橋繁樹・高橋文治、汲古書院、一九九八）が「由同猶」と注釋しているのと同様の用法である。これらは筆畫数の省略というよりも、先行する語り物テキスト風の文字を嘉靖本が引き継いだことによるものであろう。つまり、祖本は明初以前の語り物テキストの文字づかいに近かつたのではないかと思わせるものである。容與堂本に三度現れる「嫡派」が、嘉靖本では42を含め一律「的派」となっているのも同様の例であらう。馬氏前掲論文「後記」は、萬曆年間の文簡本も「的派」としていることを、嘉靖本に萬曆年間の刊行である可能性がある根據のひとつとしている。しかし、『前漢書平話續集』卷中（第八葉裏第十七行至十八行）「刘肥曰吾与惠帝是太后的子。今惠帝年幼稚主国事。惠帝詔我别无它意（劉肥が言った。私と惠帝は太後の血をひいている。今惠帝はおきなくして國事をつかさどっている。惠帝が私を呼ぶのにそれ以外の思惑はなからう）」のように、元代にも「嫡」と「的」の通用は見られる。馬氏の指摘は刊行年代を萬曆年間まで引き下げる有力な證據とは言えまい。「的派」もやはり、嘉靖本と文簡本が、祖本の文字をそれぞれそのまま引き継いだ結果な

“嘉靖本” “水滸傳” と初期の “水滸傳” 文繁本系統

のだろう。これらのように、現在では俗字・異體字とされるものには、嘉靖本は祖本を忠實に引き継いだだけであり、一概に「嘉靖本は杜撰」という言いかたに含めることはできないものも少なくないのではないか。

五

前節では嘉靖本と容與堂本とを直接比較し、その關係を考えた。本節では『京本増補校正全像水滸志傳評林』（上海古籍出版社『古本小説集成』第三輯所收）を用いて間接的に兩者を比べてみる。この本は萬曆二十二年に出版された、每半葉上圖下文の文簡本である。文簡本は容與堂本とほぼ同じ文章を有する文繁本を節略して作られたと考えられているが、『志傳評林』より早く刊行された容與堂本は見つかっていない。そこで、『志傳評林』より早くから存在していたと思われる、かつ容與堂本と明らかな親戚關係にある嘉靖本を比較作業に加えるためである。ただし、比較に必要な文字が存在しない箇所も多数あるため、利用できる箇所はおのずと限られる。また、『志傳評林』は文繁本から直接作られたのではなく、それ以前の文簡本にもとづいてさらに文章を削って作られたものであり、文簡本間での繼承の際にも文字の異同が生じたであろうことは想像に難くない。發音が同じあるいは類似した文字、および形状の類似した文字の入れ替わりはその際にも起こりやすいと考えられ、もとのテキストの影響を測りにくいため、さほど重視はしないことにする。

まず、祖本推定の有力な根據となつた25く27に該當する箇所から確認する。

25 嘉・扶攬樂大娘子上了

馬幫着便行

容…扶攙樂大娘子上車兒顧大嫂上了馬幫着便行

評…扶挽樂大娘子上車顧大嫂上馬便行

27嘉…孫立領了一行人馬都來到祝家莊 上牆裏望見是登州旗

號，報入莊裏去

容…孫立領了一行人馬都來到祝家莊後門前。莊上牆裏望見是登州旗

號，報入莊裏去

評… 到祝家莊後門。庄上望見是登州旗

號，報入庄裡去了

いづれも嘉靖本になく容與堂本にある文字が使われていて、文意も容與堂本に近い（26は削られた量が多く、判断できないため除外した）。節略前の原文は容與堂本と同じものであったのだろう。

つづいて、嘉靖本のみと一致している箇所を挙げる。

40嘉…不想遇得賢弟（第四十七回）

容…不想遇見賢弟

評…不想遇得賢弟

41嘉…蔚遲是孫立（第四十九回）

容…病尉遲孫立

評…尉遲是孫立

42嘉…柴世宗的派子孫（第五十二回）

容…柴世宗嫡派子孫

評…柴世宗的派子孫

43嘉…分撥衆頭領下了七八箇小寨 圍遼大寨（第五十二回）

容…分撥衆頭領下了七八箇寨柵圍遼大寨

評…分衆頭領下了七八個小寨

44嘉…蒼顏古貌（第五十三回）

容…蒼然古貌

評…蒼顏古貌

45嘉…喜動天顏就賜雪鳥馬一疋（第五十四回）

容…喜動天顏就賜雪鳥馬一疋

評…喜動天顏就賜雪鳥馬一疋

次に容與堂本のみにある文字を有する例。全體的にはこの例のほうが多い。

46嘉…原來 東海邊有箇州郡喚做登州 城外有一座山（第四十九回）

容…原來山東海邊有個州郡喚做登州登州城外有一座山

評… 山東海邊有個登州 城外有座山

47嘉…丹書鉄券護門庭（第五十一回）

容…丹書鉄券護家門

評…丹書鉄券護家門

48嘉…小可姓戴名宗從山東來（第五十三回）

容…小可姓戴名宗從山東到此

評… 姓戴名宗從山東到此

49嘉…李逵接過瓜鎚如弄彈子一般使了一回（第五十四回）

容…李逵接過瓜鎚如弄彈丸一般使了一回

評…李逵接過瓜鎚如弄彈丸一般使了一回

50嘉…高太尉聽了大喜道 是韓彭二員將爲先鋒何愁狂寇哉（第五十五回）

容…高太尉聽了大喜道 是韓彭二將爲先鋒何愁狂寇哉

評…高太尉聽了大喜 若是韓彭二將爲先鋒何愁狂寇哉

51嘉…差人星夜往陳州穎州（第五十五回）

容…差人星夜往陳穎二州

評…差人星夜往陳穎二州

文簡本が、嘉靖本に近い文字を持つ本と容與堂本に近い本の二種の文繁本を利用し、双方の影響を受けたとは考えにくい。そのような手間のかかることをするのであれば、より正確と思われる文字を採用するであろうが、そのような基準があるとは見えない。それよりは嘉靖本、容與堂本の中間的な文字を持つ本（と言ってもどちらかといえば容與堂本に近い。たとえば第四十九回に半葉のうちで嘉靖本「投透入火」「一箇夥家」、容與堂本「投透入夥」「一個火家」と、同じ文字を入れ替わりに使用している部分があるが、『志傳評林』は「入夥」「火家」と容與堂本と一致する）があり、それにもとづいて文簡本が作られたと考えるほうがわかりやすい。すなわち前節で想定した「祖本」の存在がここでも想定できるのである。

次に、14から20に該当する『志傳評林』の文字を確認する。ただし14、17、19は該当する文字が省略されており、比較できなかった。

15嘉…兩人交了二十餘合

容…兩個鬪到二十餘合

評…兩個鬪到二十餘合

16嘉…宋江見活捉了那天目將彭玘

容…宋江見活捉拿得天目將彭玘

評…宋江見捉了 了 彭玘

20嘉…宋江道但且放心

容…宋江道但請放心

評…宋江曰但請放心

容與堂本に近い文字も、嘉靖本に近い文字もある。さらに同種の例を確認すると次のようになる。

52嘉…二人闡了十合之上（第五十五回）

容…兩個鬪到十合之上

評…兩個鬪到十合之上

53嘉…這箇潑女人在我手里闡了許多合到恁地了得（同）

容…這個潑婦人在我手裡闡了許多合倒恁地了得

評…這個潑婦人 到有手

54嘉…二路伏兵分於左右（同）

容…兩路伏兵分於左右

評…兩路伏兵分於左右

55嘉…宋江見了大驚急令衆人把弓箭施放（同）

容…宋江看了大驚急令衆軍把弓箭施放

評…宋江 大驚急令衆軍把弓箭拖放

56嘉…呼延灼大得全勝回至本寨（同）

容…呼延灼大獲全勝回到本寨

評… 延灼大獲全勝回到本寨

『志傳評林』が祖本の文字を正確に伝えているとも限らないが、容與堂本との一致率が高いことは注目してよい。容與堂本と比べて筆畫数の少ない文字が嘉靖本に見られる箇所については、祖本は容與堂本のごとくであり、嘉靖本が獨自在筆畫数を減らす努力をした場合が多いようである。

文字の一致箇所以外に文簡本と祖本との関係を想像し得るものとして巻数がある。現存する早期の文簡本、すなわち二種の挿増本、『志傳評林』の巻数、回数については丸山浩明「水滸傳簡本淺探」（『日本中國學會報』第四十集、一九八八年）に對照表が公表されているので、これに依據しながら容與堂本と文簡本の巻数、回数の對應を確認していこう。いつたい文簡本は回数表示に無頓着なところがあり、挿増本

では同じ回数表記が二度現れることがあるし、『志傳評林』は途中で回数表記を放棄している。文簡本は文繁本の内容にさらに梁山泊軍による田虎・王慶征伐の物語をつけ足している。氏岡氏は、『志傳評林』は全體を二十五卷百回にまとめようとしたものがうまく行かず、百四回分になってしまったのだらうと述べている。ゆえに嘉靖本、容與堂本とは回数も、回の分け方の異なるところが少なくない。巻と回の關係もまちまちである。二十五卷百回ならば單純に割つて一卷四回にすればきれいに整うが、實際には回目が三分分の巻、四回分の巻、五回分の巻など、ばらばらである。本稿で扱う範圍では、卷十には回目が三分分しかなく、卷十一には四回分ある。しかし、卷十と卷十一との切れ目や、卷十一に收められている物語の内容は嘉靖本と一致している。また、第一卷から第六卷、第九卷から第十三卷では各巻におさめられている物語内容はすべて容與堂本の五回分に相當している。第七卷で容與堂本四回分の内容となりはじめてずれるが、第八巻に六回分を收めることで帳尻が合い、第十三巻末が容與堂本第六十五回末と對應する。『志傳評林』内部では巻數と回数に決まつた對應關係がなく、かえつて『志傳評林』の一卷分と容與堂本の五回分とがほぼ對應しているのである。一見奇妙なことだが、文簡本を作る際に利用した文繁本が各巻五回分の分巻本であつたと考えれば説明できる。文簡本は底本の回数には變更を加えたが、巻の分け目は變更しなかつたのである。そもそも氏岡氏のいうように二十五卷百回にまとめようとしたのも、底本が二十卷百回の形式であることをまねようとしたことからではないか。

『志傳評林』の一卷が文繁本の五回分に相當しない現象は、第十四巻に文繁本の第六十六回から第七十一回の六回分が收められて以降頻

繁に見られるようになる。これは氏岡氏の推定したように、切りのいい巻數、回数にするための改編の痕跡であらう。文簡本で追加された物語は文繁百回本で言えば第九十回と第九十一回の間に挿入されているから、全體の終盤、六十五回を過ぎてから調整を始めたのであらう。ここまでの情報を総合すると、祖本の姿は次のようにならう。

①嘉靖本、容與堂本以前に存在し、兩者の底本となつた本である。兩者は祖本の文章に意圖的な改變を加えることなく、そのまま書き寫すことで成立した。また、文簡本の底本ともなつた。回数、回の分け方と内容は嘉靖本、容與堂本と完全に一致している。おおむね容與堂本に近い文章を有すが、ところにより嘉靖本のほうが正確に受けついでいる部分もある。また祖本の時點ですでに誤つていた文字や文もある。部分的に元代から明初期の語り物や戯曲のテキストと共通する文字づかいも存していた。どのような形式（稿本、抄本、刊本）であつたかはわからない。

②版式は嘉靖本（每半葉十行每行二十字）、容與堂本（同十二行二十字）のどちらとも異なる。文字の増減の多さ、「申句脫文」の存在などから見て、雙方とも祖本の覆刻とは思えない。覆刻はいわゆる「かぶせばり」で、底本に紙を乗せ、上からその文字をなぞることで版下をこしらえるものであるから、文字の異同は生じても誤りによる増減、とりわけ寫し漏らしは生じにくい。嘉靖本、容與堂本は祖本と版式を變えたい理由があつて覆刻を避けたのではないか。

③二十卷百回本であつた。「水滸傳」繁本はその繼承の過程で百卷百回本↓不分卷百回本↓不分卷百二十回本と變化している。祖本がすでに百卷百回本で、そこから二十卷百回本の嘉靖本が作られたとは考えにくい。文簡本の分巻形式も、二十卷本を参照したものと考えられる。

物語内容は二十巻本である嘉靖本、百巻本である容與堂本と一致すると判断できるため、物語の分析に關する限りは容與堂本を通じて初期の「水滸傳」二十巻百回本および百巻百回本の研究を行うことの妥当性は認められる。しかし参照できる範囲内では、嘉靖本や文簡本を参照して祖本の様相を推定しながら利用するべきである。

④異體字・通假字については、嘉靖本、容與堂本の抄寫時期が文字の選擇に影響することもあり、一概には言えない。嘉靖本が語り物テキストに見られる異體字・通假字を使用している箇所は祖本から受けついで可能性が高い。一方、嘉靖本が獨自に筆畫數を減らすよう改變したと判断できる箇所も多くある。

六

第二節に記したように、容與堂本には國家圖書館藏本（以下、北京本と稱す）以外に、天理圖書館藏本、國立公文書館内閣文庫藏本（以下それぞれ天理本、内閣本と稱す）などがある。うち内閣本は他の二者より刊行が遅れると見られている。上海圖書館藏本（以下、上海本と稱す）は卷五十一途中から卷五十五途中までの殘本で、本稿の扱う部分と重なる。上海本は、北京本で「李卓吾先生批評忠義水滸傳卷之幾幾」と記されている巻頭題が「水滸傳卷之幾幾」に、各巻末尾の「李卓吾先生批評忠義水滸傳卷之幾幾終」も「水滸傳卷之幾幾終」に變わっているなど、李卓吾の名が消し去られているのが特徴で、この本が他の三者より遅れる證據のひとつでもある。上原究一「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中國學會報』第六十三集、二〇一一年）は、この處置を天啓五年（一六二五）の李卓吾著作の禁令への對策とみて、上海本の出版時期を天啓五年から崇禎四年（一六三二）までの六年間

と推測している。

後發の本である内閣本および上海本には、北京本と字句の異なる箇所がまま見られる。それはこれらの本の編集者が北京本ではよしとしていた（あるいは見落としていた）文字を間違ひ、あるいはわかりにくいと見なした結果なのだろう。試みに北京本と嘉靖本が一致しない箇所を内閣本、上海本がどのように處理しているかを見ると、興味深い現象が見出せる。北京本と嘉靖本との異同箇所のうち、内閣本は三十八箇所で「問題あり」と判定して文字を改めているのである。上海本は變更箇所も方法もすべて内閣本と一致する。上海本と内閣本の關係については別に考察が必要だが、この種の修正箇所については内閣本を兩者の代表としてよい。内閣本と北京本のこの種の異同三十八箇所のうち、内閣本が嘉靖本と一致するのは十八箇所、一致しないのは二十箇所であった。天理本はこの三十八箇所のうち十一箇所内閣本と同じ文字を有し、二十七箇所は北京本と一致する。嘉靖本、内閣本の文字が同じ文字で北京本のみが異なる箇所は、北京本以外の三者の文字が容與堂原刻本の文字と見てよいだろう。北京本と天理本が一致する二十七箇所は、それが原刻本の文字で、内閣本が修正した部分と思われる。そのうち、修正結果が嘉靖本と一致するのが十四箇所、一致しないのが十三箇所である。

その修正の様子を具體的に觀察してみると、「載着樂大娘子、背彼孫提轄騎着馬」を「載着樂大娘子、背後孫提轄騎着馬」（第四十九回）に、「干當重罪」を「甘當重罪」（第五十四回）に直すなど、明らかに北京本の誤りであり、他の本を参照せず、誰が直しても同じ結果になるであろうと思われるものもある。その一方で必ずしも訂正しなくてもよい部分が改められている例もある。北京本「當不住這里人多一發上去

因此吃拿了」、内閣本、嘉靖本「當不住這里人多一發上因此吃拿了」(第四十七回)、北京本「我却是拜你便了」、内閣本、嘉靖本「我却自拜你便了」(第五十二回)、北京本「只有一箇青衣童子攔住」、内閣本、嘉靖本「只見一箇青衣童子攔住」(第五十三回)などである。このような異同は嘉靖本と無關係に起こったのではないようにも思われる。もつとも、北京本「與他兩箇和李達說」・内閣本「與他兩箇美和李達起」・嘉靖本「與他兩箇賀李達說」(第五十二回)、北京本「趕離城走不到二十里」・内閣本「趕離城約走到二十里」・嘉靖本「趕離城走不到二十里」(第五十一回)、北京本「閃入村裡來却又不要認這路」・内閣本「閃入村裡來却又不要認得路」・嘉靖本「閃入村里來却又不要認道路」(第四十七回)のように全く異なる文字に訂正している箇所もあるので、内閣本が嘉靖本を直接参照したとも考えにくい。第二、第三の例は、三者とも異なる文字にはなっているが、北京本と嘉靖本は字形が類似している。第二の例は、祖本は「走下到」ないし「走不到」とあつたものを嘉靖本と容與堂原刻本の一方が誤つたもの、第三の例は祖本の「道路」を容與堂原刻が誤つたものを、それぞれ内閣本が改変した結果と思われる。

①北京本≠嘉靖本≠内閣本≠志傳評林 五例
 ②北京本≠内閣本≠嘉靖本≠志傳評林 一例
 ③内閣本≠嘉靖本≠北京本≠志傳評林 一例

比較可能な例が少なく、データとしての信頼性は高いとは言えないが、七例のうち内閣本が嘉靖本・志傳評林と一致するものが五例あり、内閣本が祖本から文字を選んだ可能性をうかがわせる。とはいえ、嘉靖本や『志傳評林』と異なる文字を採用した箇所、北京本がそもそも『志傳評林』と一致していたのに、それを嘉靖本とも『志傳評林』とも一致しない文字に變えた箇所がそれぞれ一例あることも無視できないから、すべて祖本を使つて直したと結論づけることはできない。祖本を全面的に利用したのではないだろうし(それならば容與堂本ではなくはじめから祖本を覆刻すればよいのだから)、祖本以外の判断基準によつて改めた箇所もあるのだろう。

また、右の数値には算入できないながらもこの假説に符合する例がほかにもある。28の例、北京本は「只見屏風背轉出一人來」であるが、内閣本は「背後」の二文字を一格分に横に並べて「只見屏風背轉出一人來」に訂正している。嘉靖本は「只見屏風背後轉出一人來」で「背後」は一文字一格。『志傳評林』は「只見屏風後轉出一人來」である。つまり北京本と『志傳評林』の文字を合わせれば嘉靖本と同じ文がでさる。天理本も「屏風背」であるから、容與堂原刻本ですでに誤つていたと見てよい。祖本には「背後」とあつたものを容與堂原刻本は誤つて「後」を落としてしまい、『志傳評林』は文字數を減らすために意圖的に「背」を削り、嘉靖本は「背後」二文字をそのまま寫したのである。内閣本は「屏風背」では不自然であると考えたのだろうか、版式は北京本、天理本と同じで「屏風」と「轉」の間には一格しかなく

いの中から、『志傳評林』と同じ「屏風後」に改めるのがもつとも簡単かつすっきりした方法だったはずである。それを一格分にわざわざ二文字詰め込んでまで「屏風背後」にしている。しかし編集の際に祖本系の本を参照していたとすれば、このような手間をかける可能性はある。

これらの状況からすると、内閣本が編集、出版されたころまで、容與堂本系とは別に、祖本を受けついで文繁百回本が流通しており、内閣本の編集作業に用いられた可能性もあろう。編集において参考資料とされ、ところによつては底本の文字が捨てられ祖本系統の文字が採用されているとなれば、この時期、祖本系統の本は筋のよい本と見なされていたとも言えるのではなからうか。

七

本稿では嘉靖殘本と容與堂本、さらに文簡本との比較から初期の「水滸傳」版本について考察を行い、すべての共通の來源となつた「祖本」の存在を設定し、その原貌を推測した。容與堂本は百卷百回、嘉靖本は二十卷百回であるが、祖本は二十卷百回であつただろう。『百川書誌』の記載でわかるように、遅くとも嘉靖十九年には百卷本「水滸傳」は存在していたはずであるから、萬曆年間初刻の容與堂本は百卷百回に改編した最初の本ではない。祖本から現存する容與堂本までの間にはいくつかの本があつたのだろう。嘉靖本は祖本から直接生まれたものか、間に他の本があるのかわからない。文簡本は祖本にもつづいて作られたと見られ、容與堂本の後印本にも祖本を参照して修正を施した可能性が考えられるから、祖本や祖本直系の後發本は明代後期まで回頭つていた可能性がある。この假定は李開先、錢曾らが「水滸傳」

が、かつて二十卷（二十冊）であつたことを知っていることも合う。明後期には百卷百回本のみならず不分卷百回本、百二十回本、七十回本、各種文簡本なども登場していたから、二十卷本が「古本」と稱されたのだろう。明末の金聖歎が「水滸傳」の古本を入手したと稱したのも、「古本」があるという知識を人々が共有していたことを利用したもののだろう。

容與堂本の後發本の改編方法については本稿で觸れたもののみでは資料は十分とは言えず、まだ検討の餘地がある。各種容與堂本の全面的校勘を行つたうえで改めて容與堂本と祖本との關係を論じる必要も出てこよう。

國家圖書館にはほかに、部分的には古い文章を残しているのではないかと言われながら、どこが補刊部分なのか正確にわからないために資料として使われにくい『李卓吾先生評水滸全傳』（いわゆる石渠閣補刊本）も所蔵されている。本稿の考察と關係づけることで、この本の性質についても多少なりとも理解を深めることができるのではないだろうか。これらは今後の課題としたい。

注

- (1) 高儒『百川書志』（『百川書志 古今書刻』古典文學出版社、一九五七年所收）
- (2) 『李開先集』（中華書局、一九五九年）
- (3) 國立公文書館内閣文庫藏本『也是園藏書目』（抄本・林大學頭舊藏）卷十「通俗小説」
- (4) 張丑『清河書畫舫』（『景印文淵閣四庫全書』臺灣商務印書館）卷十二上「祝允明」に「又一好事家收文徵明小楷古本水滸傳」とある。

- (5) 氏岡眞士『水滸傳』と余象斗(『人文科學論集』(文化コミュニケーション ション學科編)第38号、信州大學人文學部、平成十六年)が現存する初期の文簡本の繼承關係を論じている。
- (6) 文繁本が文簡本に先行することについては大内田三郎『水滸傳』版本考―再び繁本と簡本の關係について―(『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八六年)などの論考がある。
- (7) 發見の經緯は馬幼垣「嘉靖殘本『水滸傳』非郭武定刻本辨」二「發現與公佈的經過」に詳しい。
- (8) これには、影印本が刊行されず、寫眞撮影や複寫の數量も制限されていることが關わろう。『完譯 水滸傳(一六)』(岩波書店、一九九九年)清水茂「注」がその事情をよく傳えている。「この卷(引用者注・卷五十一)から卷の五十五まで、現存のいちばん古い『水滸傳』のテキストト明嘉靖刊本の零本が存し、……人民文學出版社一九五四年版『水滸全傳』に、この書の校勘記が特に作られ、テキストの異同をうかがうことができる。それによれば、この譯の底本内閣文庫藏容與堂刊本と、……それほど大きな差異はなく、同一系統のテキストと認められる。……卷頭も卷尾もなく、序も刊記も存しないから、字體など書品から嘉靖刊本と推定するだけで、どういう手によつて成つたものか確定のしようがない。」清水氏は原本も寫眞も見ることがかなわなかつたようである。
- (9) 「第五十一」と印字されているようだが、「一」の字が手書きで「落」に改められている。
- (10) 注七前掲論文に「首次出現的是由第四十六至第五十回组成的一册。……过了一段时间后,书贾朱某……自冷摊找到第五十一至五十五回组成的「一册」とある。ただ、「一卷」を發見したとは言っていない。
- (11) 『明成化說唱詞話叢刊』(鼎文書局、中華民國六十八年)
- (12) 話本、雜劇に類似の例が見られることは、中國古典小説研究會
- 二〇一一年度大會報告の際に名古屋大學の笠井直美先生よりご指摘をいただいた。
- (13) 氏岡氏注五前掲論文參照。
- (14) 氏岡氏注五前掲論文參照。
- (15) 笠井直美「北京大學圖書館藏『忠義水滸全傳』―「萬曆袁無涯原刊」情報の一人歩き―」(『名古屋大學中國語學文學論集』第二十一輯、二〇〇九年)參照。